



定年後、世界一周ひとり旅

第4回



退職後の夢の2つ目も実現

定年後にやりたかった4つのこのうち、一番目だった「世界一周ひとり旅」を実行に移した私は、シンガポールを振り出しに、インド、トルコ、エジプト、そしてギリシャからヨーロッパへ入り、旅を続けました。その道中は、まさに危機一髪のトラブルと、思いもかけない助け舟の出会いが交錯しました。道に迷っていると気付いたのでしよう、遠くからわざわざ歩み寄って声をかけてくれたベルリンの青年、地図まで描いて近道を教えてくれたエディンバラの中東系の店員、重い荷物をさげて地下のトイレへ降りようとする私を見かねて、ハンディキャップのある人用のトイレへ導いてくれたロンドンの黒人の清掃員、雨の中、途方に暮れていた私のためにタクシーを呼んでくれたウイーンのホテルマン…。本当に旅の間中、助け舟だらけでした。もちろん怖い思いもしました。腹の立つこともありました。「ポートルート・ギヤラリとはどつち？」と尋ねると、トラファルガー広場の青年は、全く反対の方向を指差しました。イスタンブールの日本人をカモにする客引きのしつこさと相手にならないとわかった時の捨て台詞は、気分が悪くなりました。

ロンドン近郊、タンブリッジ・ウエルスの語学学校に2週間入学した時、トラブルが発生しました。その際のスタッフの対応には、「ああ、こんなに冷たくしなくても」と悲しくなりました。ニューヨークで、私のホテルへ案内しきれない元米兵のタクシー運転手に1時間以上連れまわされたあげく「お前のホテルはどこだ!」と、すっかり暗くなつた見ず知らずの地で怒鳴られた時は絶望的でした。思い出せば本当にいろいろなことがあつた74日間の旅でした。好奇心が満たされたり、今まで見たことのない美しいものに激しく心が揺さぶられたりすることも多くあつたのですが、今思い返せば、優しくしてもらつたこと、親切にしてくれたことの思い出が強く印象に残っているのは、なぜでしょうか。肌の色、言語、宗教、文化、境遇などなどあれこれの違いを乗り越えて人は他人に優しくなれるのだと身をもつて知ることができたからのような気がします。アイルランドのキラニーのレストランで、隣りのテーブルにいたカップルはとても楽し

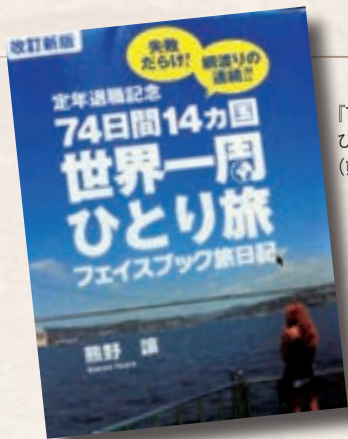
そうでした。が、声が聞こえてきません。お互い言語と聴覚に障がいのある2人でした。でも笑顔と身振り手振りの様子が、こちらにも2人のうれしさや楽しさを伝えてくるのです。時々、テーブルの下で握り合う手がまたこの上なく素敵でした。イスタンブール、ボスポラス海峡の波止場で名物B級グルメのサバサンドを食べに入つた店では、父と娘の親子連れと隣り合わせでした。1つの皿を挟んで2人は全く無言です。お父さんが食べやすいようにサバサンドをちぎって娘の口を持っていきます。どうやら女の子は自分では上手に食べられない発達状況のようでした。父の差し出すサバサンドに何とか顔を近づけ口に入れようとしていました。その様子を見つめるお父さんの顔が、私には何とも悲しげに見えてしまいました。それでも見続けていると、彼が娘に注ぐまなざしは、昨日その美しさに感動した、アヤ・ソフィアの壁面に描かれたモザイク画の、慈愛あふれる聖人のまなざしと重なって見えてきました。誰にも生きる権利がある、誰もが幸福になる権利がある。世界中どこでも、恋人や



熊野 譲

【くまの・ゆずる】

1953年山口市生まれ。国内外の旅、鏤絵（家の壁などにつくられる漆喰のレリーフ）画像の収集、下手なゴルフを趣味とする部分年金生活者。元公立中学校教師。下関市在住。



『74日間14カ国世界一周
ひとり旅フェイスブック旅日記』
(熊野 譲 著、一粒書房 刊、2015年3月)

親子は愛にあふれている。そんなことを感じさせてくれる旅でもありました。

実は、旅の間中ずっとフェイスブックに旅日記を記していました。「リタイア日記・世界一周ひとり旅編」です。旅先でのいい話、辛い話、面白い出来事を毎日書き込んでいたのです。「がんばれ」や「すごいね」などたくさんエールが届きました。トラブルの内容によっては、とても具体的なアドバイスももらったりしました。

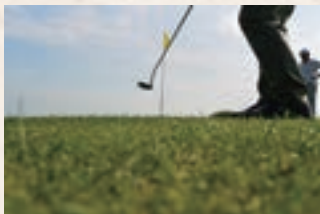
ひとり旅とは名ばかり、実は多くの人と旅をしていたのです。「人は人に傷つき、そして人に癒される」。昔の映画のコピーでうる覚えですが、自分の人生は多くのひとのさまざまな交わりで支えられていると気づかされました。



ベリーを売る露天商 カンタベリーで



アイリッシュは音楽大好き



憧れのリンクスで芝刈り!

アイルランド、リメリックの古城から



私の世界一周ひとり旅は、最終的には計画通りの日数と訪問国をクリアできませんでした。イギリスで財布をなくした(奇跡的に戻ってききました)が、あたりから心が脆くなっていったからです。

ニューヨークの空港でスーツケースが行方不明になり、数時間ロスした上に、当局に無断で中身を開けられたことや、ホテルが見つからず夜の街をタクシーでうろちうろちして、約束の数倍の運賃を払わされたことがほとんどかぶさっていき、ついにリタイアしてしまいました。

私がアメリカを発った翌日から一帯は豪雨に襲われたので、ホテルに缶詰めの状態にならずに済んだことは幸いでした。禍福はあざなえる何とかなります。

帰国後、ある人から「日記が面白かったから本にしたら」と勧められたこともあり、自费出版しました。これで、定年後の夢がもう1つ実現しました。自费出版で大損をした話をたくさん聞いていたので、よくよく考えて出しましたが、結果は発行数カ月後には増刷を果たし、2016年秋には改訂新版も出すことができました。

定年後、私はそれまでの人生で経験していないことをいくつも経験しました。定年後も新しい世界に次々出会って「引きこもって」はいられません。

Anyone who keeps the ability to see beauty never grows old.

美しいと感じる能力を持ち続けられる人は老いることがない。カフカの言葉です。